

黒木博司少佐と「楠公回天祭」



橋本秀雄
(前回天楠公社奉賛会事務局長)

「楠公回天祭」とは

楠公回天祭は、人間魚雷「回天」を創案した黒木博司少佐を始めとする回天勇士をお祀りする回天楠公社の例祭である。

お社は、少佐が師と仰いだ元東京帝国大学教授平泉澄博士が、昭和三十一年九月、少佐の故郷岐阜県下呂市に創建された。御祭神は楠木正



海軍少佐黒木博司遺影

「回天」と黒木少佐

執筆紹介
昭和22年(1947)岐阜県生。岐阜大学教育学部物理科卒業。主に中学理科教師として務め、大垣市立東中学校長で定年退職。昭和60年から平成23年まで回天楠公社奉賛会事務局長。現在、岐阜県教育懇話会会長、日本教師会事務局長、日本学協会評議員等を務める。

となつてゐる。

回天は、当時、世界最高の性能を誇つた93式酸素魚雷を、一人乗りのミニ潜水艦に改造したものである。先端に1.5トンの爆薬を装填し、乗員の操縦により敵艦に突入する、特攻兵器であつた。

その開発と兵器採用を推進したのが、黒木博司少佐(当時、大尉。殉職後、少佐に昇任)であつた。

少佐は、大正十年九月十一日、下呂村湯之島で医院を営む父弥一と母わきとの次男として誕生した。

父は、医は仁術を地で行く地元で信頼の厚い名医であり、母は情に厚い芯のある賢夫人であつた。

特に母は常に「百人の人に笑はれても一人の正しい人に褒められるやう、百人の人に褒められても、一人の正しい人に笑はれないやう、正直で曲がつたことをしない」を信条に子供たちを育てた。しかも、紀元

節・天長節の式日には赤飯を炊いて祝ふ家庭であつた。

心身共に健やかに成長した少佐は、岐阜市の岐阜中学を経て、昭和十三年十二月、十七歳で海軍機関学校に進学した。

少佐は、合格時の感激を、画仙紙一杯に「我先に海軍の受験をして天皇の股肱たらんことを志す、而して・(海軍の) 発令に接す、嗚呼男児の本懐之に過ぐるなし」と大書してゐる。

入学後、その気概のままに猛烈な訓練と学業の日々を送り、資質を高めていった。そして、講演のため来校した平泉博士との出会いにより、少佐の志は確立した。

昭和十五年の夏、休暇を利用して上京し、博士へ入門を願ひ、翌年八月に再び訪れた。その折の礼状に、「先生の御教を仰ぎて万人の味方を得たることにて候」と書き、両親へは、「今夏完全に不動不拔聊かも揺るがぬものと為すことを得」と報告してゐる。

昭和十六年十一月、機関学校を卒業すると、戦艦山城の分隊士として十名ほどの新兵を預かつた。吉田松陰を理想としてゐた少佐は、寝起きを共にし、訓練も率先垂範、親身になつて育てた。兵たちは「分隊士のためなら死んでもよい」と言ふほどになつた。翌十七年八月、少佐が潜水学校へ入学するため退艦する

当初、平泉博士が直会で回天の意義を語られたが、後に少佐の先輩・知友などが少佐の面影や回天の感銘を語られた。若い参加者もその精神を学び、受け継ぐことを誓ふ場

成成で、黒木博司少佐と回天勇士が合祀されてゐる。

毎年、少佐の命日である九月七日に近い日曜日に斎行し、本年(九月八日)で六十一回を迎へる。

毎回、少佐や回天勇士を慕ふ人々が全国から集ふ。元回天隊員が参列した頃は、二百名を越すこともあつた。靖國神社元宮司松平永芳氏は海軍機関学校出身で、少佐(51期)の先輩(45期)として、長年、参列されてゐた。

と、兵たちは別れを惜しんで泣いたといふ。

潜水学校の講習を終へると、少佐はさらに特殊潜航艇の講習員を希望した。しかし、当時の制度では、艦艇の長は兵学校出身に限られてゐた。それでも少佐は血書嘆願などをして、昭和十七年十二月、やうやく許可され、機関学校出身者として初めての講習員となつた。

配属された呉海軍工廠魚雷実験部は、特殊潜航艇の訓練と研究・生産を行つてゐた。少佐は海軍兵学校出身の九人と猛訓練を始め、特殊潜航艇の改良に力を發揮した。

昭和十六年に真珠湾攻撃で始まつた大東亜戦争は、緒戦で成功を取めたものの、昭和十七年六月のミッドウェー海戦に敗れてから形勢が逆転した。少佐は、日本の劣勢を知ることにつけ、特殊潜航艇では間に合はないと感じた。

同室の仁科関夫中尉（戦死後、少佐に昇任）と連日、戦局挽回の策を練り、93式酸素魚雷を改造して人間が操縦をすれば、大きな戦果が期待出来ると思ひついた。

少佐は回天の設計図を書き、海軍省へ兵器として採用するやう請願

をした。しかし、上層部は必死の戦法は採らないとして拒否した。

けれども、それに屈せず、昭和十九年五月、あらためて「急務所見」と題した長文の嘆願書を血書で認め、海軍省に提出した。

その前文は「未だ聖慮を安んじ奉る事を得ざる、嗚呼臣が罪誅に当たる」に始まる。

それ以下、第一に「死の戦法に徹底すべきこと」として人間魚雷の早期採用を説く。第二に「天下の人心を一にすべきこと」として吉田松陰の言葉を引いて、「真に天朝を憂ふ」人材を育成すべきで、何を守るかの信念を明確にもつ国民を育てなければならぬと述べてゐる。第三に「陸海軍一致すべきこと」とする。両者の主導権争ひといふ悪弊を取り除き、一致して戦ひに臨めるやう提言する。

最後に「緊急の策を即刻断行すること」として、特攻兵器の製造、補給線の確保を求めている。

建白書は高松宮殿下の台覧にも供せられ、海軍上層部に与へた影響は大きく、昭和十九年六月、やうやく回天は兵器に採用された。

九月初め、山口県大津島の魚雷

実験場に回天基地が開設された。少佐と仁科中尉は、指導者として隊員の訓練に当たつた。

訓練二日目の九月六日、天候が荒れてゐた。訓練を中止するやう、仁科中尉から勧められたが、少佐は「風雨があつても敵は待つてくれな」として、樋口孝大尉（殉職後、少佐に昇任）の艇に同乗した。

しかし、荒波により樋口艇は海底へ突入してしまつた。翌朝、捜索隊が発見した時には、既に二人とも息絶へてゐた。二人は満二十三歳を迎へる直前であつた。

艇内には多くの遺書が残され、壁に「大日本帝国万歳、天皇陛下万歳」とあり、ノートには事故の経過やその理由、回天の改良点などが克明に記されてゐた。

そして、陛下へのお詫びと共に平泉博士や先輩諸友への感謝を綴り、仁科中尉へ後事を託してゐた。

末尾にあつた黒木少佐の遺詠に、「死せんとす益男子のかなしみは留め護らん魂の空しき」とあり、絶筆は「君が代斉唱、神州ノ尊、神州ノ美、我今疑ハズ、完爾トシテユク、萬歳」であつた。

基地の人々は二人の見事な最後

に感動し、皆一丸となつて激しい訓練を続けていつた。

十一月八日、仁科少佐を隊長とする「神潮特別攻撃隊菊水隊」が出撃した。同月二十日、菊水隊は南太平洋ウルシー湾の艦船を急襲し、大きな戦果をあげた。

以後、金剛隊・千早隊・多々良隊と、少佐が崇拜した楠公に関する名を冠した回天隊が、続々と出撃した。「七生報国」を合ひ言葉に一千四百名余の若者が隊員に志願し、一四五名が亡くなつてゐる。

楠公回天祭の意義

少佐の志願は、皇国護持にあり国民の一人一人が楠公の精神に目覚め、尽くすことであつた。

戦後の我が国は、占領政策の影響により、その精神を失ひ、今に至つてゐる。我が国内外の危機的な近況を見ると、少佐が懐いた祖国の将来への不安が、現実のものになつてゐると感じる。

回天祭は有志の集ふささやかな祭典であるが、今後、祖国復興の聖地になることを念願しながら、奉賛会員一同、継続することに努めてゐる。（令和六年五月六日記）